

## Case 8

### 地域子ども達を対象とした自然体験活動

## 東京家政学院大学『森のようちえん』

現代生活学部 児童学科

### 町田キャンパスの四季を生かした自然体験活動を企画・運営

児童学科では、町田キャンパスの豊かな自然環境を活かして、大学近隣地域に居住する子ども達を対象とした自然体験活動(森のようちえん)の企画運営を行っています。活動開始から11年目となる令和6年度も、年間を通じた活動を展開しました。

#### 令和6年度「森のようちえん」実施概要

【日程】月に1回、土・日曜日 14～16時 年間計11回

【参加者】年少～小学校3年生 31名(幼児16名、小学生15名)

【場所】東京家政学院大学 町田キャンパス



#### 学生主体での企画・運営



活動内容を企画し、当日の活動を主導するのは、「主任」と呼ばれる学生の担当者です。主任は各回に一人ずつ、立候補制で決定しています。事前に教員と相談しながら、季節などをふまえて活動内容を企画し、準備を進め、活動当日は先頭に立って活動を運営します。主体的に「場」をつくる経験や、人の前に立って集団をリードする経験を通じて、保育者・教員としての能力だけでなく、社会で求められる汎用的能力を鍛えています。

#### 地域子ども達・保護者・本学学生の交流の場

参加者の子ども達は5～6人ずつの班に分かれ、担任となる本学学生2～3人とともに活動します。令和6年度は、4月～9月の前期は横割り班、10月～3月の後期は縦割り班で活動しました。半年間にわたって同じメンバーで継続的に活動を共にすることで、子ども同士、また学生と子どもとの間に、学校や年齢の壁を超えた繋がりが生まれているように思います。また解散時には、担任の学生から保護者

に対し、その日の活動の様子や、時には小さな怪我等の報告を行います。保護者との対話のなかで子どもを預かる責任感を感じるとともに、そのなかで感謝の言葉を直接受け取ることは、学生達にとって自身の取り組みが地域の子育て世代に喜ばれ、社会に貢献できているという実感を得ることに繋がっているように思います。



## 令和6年度の活動プログラム

### 第1回「春のタケノコ掘り！」(4月20日)

アイスブレイキングゲームで班ごとの交流を深めたのち、保護者も含めてキャンパス内の竹林に移動し、タケノコ掘りを体験した。

### 第2回「もりのおともだちを見つけよう！」(5月18日)

顔に見える自然物を探しながら裏山探検を行った。

### 第3回「森のミッションに挑戦！」(6月9日)

「フィールドビンゴ」に書かれた様々なお題に合う自然物を探しながら裏山を散策した。

### 第4回「七夕かざりづくり！」(7月7日)

自然物での七夕飾り、竹を使った短冊(竹簡)作りを行った。

### 第5回「水遊び」(8月24日)

プールや水鉄砲を使った水遊び、ハンモック遊びを行った。

### 第6回「お泊まりキャンプ！」(9月21-22日)

テント設営、野外炊事などのキャンプ生活を体験した。

### 第7回「さつまいも掘り」と「落ち葉の窓作り」(11月30日)

食物学科から畑の一面をお借りして育てたサツマイモを収穫した。

### 第8回「クリスマスツリーづくり！」(12月7日)

紙粘土と自然物を使ったクリスマスツリーづくりの工作を行った。

### 第9回「お正月の遊びで寒さをふっとばそう！」(1月11日)

駒回し、凧揚げ、ドッジボールなど身体を動かす遊びを楽しんだ。

※10月:子ども体験塾への参加 ※2月、3月:原稿作成時点で未実施



4月



5月



6月



8月



9月

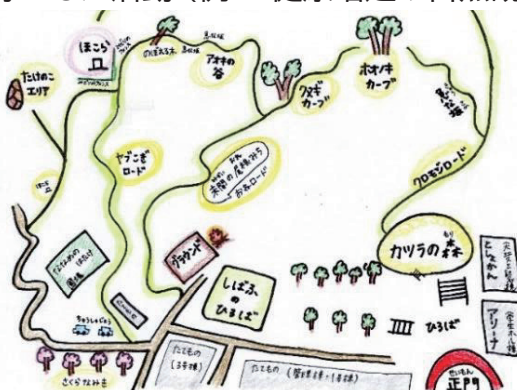


11月

## 本学の「森」という資源を生かした地域連携に向けて

町田キャンパスの裏山は、多様な植生や起伏に富んだ散策路など、自然のなかでの教育やレクリエーション活動を展開するうえで価値の高い環境が整っている。子どもを対象とした自然体験活動に留まらず、より広い地域住民を対象とした活動(例:健康増進や自然観察、自然物を活用した工芸や食文化体験など)を展開することも可能である。自然環境という本学の貴重な資源を活用した地域連携活動を今後も検討していきたい。

(図:裏山マップ)



### プロジェクト概要

#### ●担当教員

現代生活学部 児童学科  
助教 佐藤冬果  
(その他 教学補助員 1名)

#### ●学生

現代生活学部 児童学科  
1年生 7名  
2年生 16名  
3年生 7名  
4年生 13名 計43名  
うち各回、15名前後が参加

#### ●実施期間

令和6年4月～令和7年3月  
(全11回)